

解 答

□

問1 手品師はたねやしかけをつかって不思議なことが起きているように見せているだけが、おじいちゃんの手品にはたねがあるとは思えず、魔法を使って実際に不思議なことを起こしているように見えるから。

問2 おじいちゃんの物忘れが最近はげしくなり、手品ができなくなることを心配していたから。

問3 おじいちゃんの手品師

問4 麻子を喜ばせようと手品をし、麻子の笑顔を見てうれしそうに笑うおじいちゃんに、麻子自らが手品の失敗を指摘すれば、おじいちゃんはひどく傷つくだろうと思ったから。

問5 手品

問6 おじいちゃんがこれまでのようなすてきな手品を見せられなくなり、客から失態をやじられ、やじられてもあわれまれもしなくなること。

問7 孫の麻子ではなく、客の一人として手品の失敗を指摘し、おじいちゃんに気づかせるため。

問8 世界一の手品師と言わされてきた自分の面目が立たないと思ったから。

問9 真剣にやりなおしをしても思い通りの手品ができなかつことで、手品師としての自分の衰えを自覚し、客の期待する手品ができない以上、もう舞台には立てないと考えている。

問10 手品師の孫として、物語の主人公としてではなく、ほかの客と同じ、見物の一人として麻子を位置づけるため。

問11 (i) すばらしい手品師にふさわしい、潔い引退のしかたに敬意を感じ、感動で胸がいっぱいになっている。

(ii) はじめは、とつぜんのショーの中止に困惑し、「ブラヴォー」の意味もわからなかつたが、手品のくりかえしや手品師のアナウンスを考え合わせてその意味を理解し、老手品師の舞台人生の見事な幕引きを賞賛する気持ちになった。

問12 孫としてではなく、世界一の手品師の潔い引退に立ち会つた大勢の見物の一人として位置づけているから。

問13 手品師として衰えても、失態を見せてやじられたり、がっかりされたりすることなく、世界一の手品師だった人として賞賛されたまま、記憶されること。

□

- | | | | | | | | |
|--------|------|----------|---------|--------|--------|-------|--------|
| ① 圧巻 | ② 遺産 | ③ 無私 | ④ 収容 | ⑤ 幹線 | ⑥ 挙手 | ⑦ 沿革 | ⑧ 稅務署 |
| ⑨ 認明 | ⑩ 参拝 | ⑪ 牧舎 | ⑫ 錄画 | ⑬ かんべん | ⑭ おいうち | ⑮ じゅく | ⑯ けっさい |
| ⑰ くろしお | ⑱ くだ | ⑲ みやこおおじ | ⑳ ぎょぎょう | | | | |

解 説

問一 「一つとして同じたねのはなかつたし、たねがあるなどとは、麻子にはとても思えなかつた」と書かれています。だから、「麻子にとっておじいちゃんはもはや、手品師なんかではなかつた」というわけです。逆にいえば、たねがある手品をする人が手品師だということになります。設問の指示にしたがつて、「手品師は……だが、魔法使いは……だから」という回答を作つてみるといいでしょう。

問二 「というのも……」以後にその理由が書かれています。おじいちゃんが物忘れがはげしくなってきたことを思えば、たとえ「世界一」でなくとも、元氣でいてくれさえすればいいというわけです。

問三 見物していた人たちが「ブラヴォー」と叫んだのは、かれらがおじいちゃんの失敗に気づかなかつたからです。なぜ、気づかなかつたのかを説明している一文を選べばいいでしょう。

問四 「ほんとうのこと」とは、おじいちゃんが「ぼけ」ているということです。おじいちゃん自身は、そのことに気づいていないわけですから、ほんとうのことを知つたら傷つき、悲しむことでしょう。麻子はおじいちゃんを悲しませたくなかつたのでしょう。

問五 「そうしてやることでしか、孫を救えない」と書かれていますが、おじいちゃんには、「孫への思い」のほかにできることがあったはずですが、それが、ここではなんの役にもたたないというわけです。

問六 「枯葉」とは、これからのおじいちゃんをたとえたことばです。「ぼけ」のはじまったおじいちゃんですが、いまはまだ、観客はそのことに気づかなかったり、気づいている人もあわれんでくれています。しかし、これからは、みんなはおじいちゃんをふみつけたり、気にしなくなったりするというわけです。人をふみつけるとは、ばかにしたり批判したりすること、気にしないとは、いまは一流の手品師だったおじいちゃんの現在の姿におどろき、あわれんでくれている人たちも、おじいちゃんをあわれみもしなくなるということです。

問七 わめいたのは、おじいちゃんに失敗を気づかせるためでしょう。大人の御婦人みたいにふるまつたのは、孫の麻子としておじいちゃんを苦しませることはできなかつたからでしょう。だから、孫としてではなく、やりかたの汚さに目をそむけているクロウトのひとりとして、失敗した手品師を責めることにしたのでしょう。

問八 直前に「はっとなって——ワレに返った」と書かれています。「ぼけ」はじめているおじいちゃんですが、手品師としての失敗を指摘された瞬間に、世界一の手品師だったおじいちゃんの魂がゆり動かされて、正気をとりもどしたのでしょう。

問九 「これでおしまい」とは、たんに今回のショーを終わらせるという意味ではなくて、手品師としての生涯に幕をおろすという意味です。「おしまいにしたい」とは、いつか引退においこまれるのではなく、いま正気をとりもどしている自分自身の意志で、幕を引きたいという思いがこめられているのではないでしようか。

問十 孫としてではなく、おじいちゃんの最後の手品を見とどけた観客のひとりとして、感動したことを表現したかったからでしょう。それまで麻子の視点からえがかれていたこの小説が、この瞬間だけ、麻子をもひとりの登場人物としてえがくものに変わります。この視点の変更によって、読者は観客のひとりとしての視点を獲得し、麻子の「ブラヴォー」を見守り、心を動かされ、しだいにおじいちゃんの別れの挨拶に感動していくひとりの観客になることができるわけです。

問十一 事情を知っている麻子の「ブラヴォー」には、おじいちゃんの手品に対する称賛と同時に、今回は、おじいちゃんの決意に対する称賛がこめられているはずです。しかし、観客には事情がわかっていなかつたはずです。そこで、いきなりのお別れのことばに対して、「どよめき」がおこり、次に「しんとなった」わけです。したがつて「あっけにとられて黙り」こんでいたときには、なぜ麻子が「泣きながらブラヴォーをくり返していた」のかという事情がわかつていなかつたのでしよう。しかし、「小さな拍手が起こり……」からは、それぞれに、おじいちゃんの「これでおしまいにしたいのです」ということばの意味と、何度も「ブラヴォー」をくり返す麻子の行動の意味とを受けとめていったのでしよう。

問十二 「大人の女の人のように」とは、麻子が孫としてではなく、ひとりの人間としておじいちゃんに接していることを表しています。

問十三 「枯葉」とは、人にふみつけられ、ふみつけていることさえ気づかれないような存在だったはずですが、「押葉にされ、かざられ」れば、けつしてふみつけられることもなく、そして、長いあいだ残るものになります。おじいちゃんの場合は、手品師としての名声が語り継がれ、尊敬されつづけることを意味しています。